

短編小説「日照り（旱）」は趙清閣が発表した最初の作品で、彼女はこれを書いたことにより体制批判をしたとして当時の国民党政府に目を付けられることになった。趙清閣は一生を通じて無神論を貫き、常に底辺に生きる人々を題材として作品を書きつづけた。彼女の強い信念と精神力の片鱗がすでにこの作品の中にも現れている。

# 日照り

## 一

昼ごろ老張(ラオジャン)が力なくキセルを持って陳二の家に行き、中に入ろうとしたとき陳二(チェンアール)がぐっすり眠っているのが見えた。

「こいつ、まだ寝てやがる。」

彼は独り言を言いながら走って行き、陳二の尻を二回蹴とばした。

「おい、もう昼だぞ、ぐっすり寝てやがる。まさかお前、死ぬまで寝てるつもりじゃないだろうな？」

陳二は声を出さずに尻が動いた方に向いて、また寝ようとした。

これに怒った老張はやみくもに陳二の頭の上にキセルを振り下ろして叩いた。かなり痛かったのだろう、彼はすばやく起き上がった。

「おい、ただ寝てるだけで、生きようとは思ってないのか？」

青筋を立てて怒って責めているような様子の老張を見て、さすがに陳二も不安を感じて立ち上がった。

だれも好き好んで寝てるわけじゃないよ、兄貴、寝なかったら何かいい方法があるってのかい？ お天道様が雨を降らせてくれないのに、なんで俺にやつあたりするんだよ。なあ、俺を起こしてどうするんだい？

彼の言うことももっともだった。実のところこの数日間、老張は寝ずに考えても打つ手を思いつけずにいた。ここ数日の天気では村人のほぼすべてが横になっているしか方法がなかった。ただ、勇敢で頭の切れる小阮の姿が見えなかった。

「わめくんじゃない、そんなに寝てばかりいるよりは、みんなでいっしょに方法を考えた方がいいんじゃないかって言ってるんだ。」

老張の怒りが消えたのを見て、陳二もすこし落ち着いたようだった。

「行こう、柳の陰に座ろう。」

老張は陳二を向かい側の小高いところにある柳の木の下に引ひっぱっていった。陳二は眠そうな目言った。

「なあ、老張！ 柳村がずっとまあまあ豊かで人口も多いところだったのに、今回ばかりはまったくおかしい。なんで日照りがこんなに続くんだ？」

雨乞いをしてもだめ、願かけしても効き目がない、頭を地面にすりつけてお香を焚いて拜んでもみんな外れてしまう。何かおかしいぞ？

あの“わら小屋の女房”のせいじゃないかな？ 昔の人が言ってるじゃないか、悪女が神を汚すって。今回の八割方は罰があたったんだ、そうは思わないかい？」

それは……」と老張は眉間にしわを寄せて言った。

「そうかもしれんが、どうやったらあの女を追い払えるんだ？ それにこの何日か、あそこにひやかしに遊びに行くやつが増えた。

特に高家沖(ガオジャーチョン)の家の高貴中(ガオグイチョン)がまるっきりおかしくなっちゃまって、毎日あの女のところで酒を飲んで騒いでいる。自分の女房が王五(ワンウー)といい仲になっているのも知ってるくせに放っているんだ。

李麻子(リーマーズ)や黒斑鳩(ヘイバンジウ)、一只眼(イーチャーエン)①も毎日行って賭け札をしてるらしいぞ。

「あいつらだったらやりそうなこった。まったくあいつらはやっかいの種で、わざとあの女を喜ばせているんだ。昨日はおれも半日、ばかなことやったが、確かにあの女は美人だ。」

これを聞くと老張はいら立って吐きすてるように容赦なく言った。

「このばかやろう、こんな時にも女買いをするのか？」

「違うよ、違うよ。そんなこと言ってないよ。おれはあいつらの代わりに説明してやったんだ。

あんたは女を追い払うのはだめじゃないって言ったが、ことばをよく考えたほうがいいよな。」

老張はうなずいた。二人はそれで黙りこんだ。

ついに老張が、まず女に相談をもちかけ、もし嫌だと言ったら、構わずにみんなが一緒になって追い払う、という方法を提案した。

陳二が首を振って言った。

「まずはみんなと相談したがいい。もしあいつらがそのときに加勢しなけりゃ、おれらがばかを見るよ」

「じゃあおれが高貴中に言いに行こう。あいつがどんな態度に出るか、話はそれからだ！」

老張は元気に歩いていった。いっぽう陳二は何もすることがなくてつまらなさそうに、田んぼの中の枯れてしまった苗を見ていた。

とつぜん犬が立ち上がったので陳二は驚いて飛び上がった。なんと楊樹村の親戚でいとこの呉得勤(ウードゥーチン)じゃないか。

「涼んでんのかい、兄さん！」呉得勤が話しかけながら破れた麦わら帽子を扇子のように使ってあおいでいた。

「おい、お前、そんなに熱心に走って、何かあったのか？」

呉得勤は何もこたえず陳二の家を走って行って冷たい水を何杯か飲むと、柳の陰に来て言った。

「ほかでもない、日照りのことで解決策を特に話しに来たんだ。」彼はわざとことばを切って、また言った。

「おれたちの田んぼにはもう水が来たようなもんだ。あんたたちやどんな準備してるんだい？」

これを聞いて陳二は気も狂わんばかりに喜んだ。

おれたちやもう死ぬと焦っていたところだったんだ。早く教えてくれ、どんな解決策なんだ？

「幸運だ！ 街の胡区長が上海から灌漑用の機械を買ってきた。それを使うと遠くから好きなだけ水を畑に引いてこれるんだ。二日もあればあんたたちの村がみんなよくなる。でも、お金が要る。」

どれだけあったら村全部に水が引けるんだ？

陳二びくびくしていた。彼はその金額ができる範囲であることを望んだ。

呉得勤は指を一本立てて見せた。

「どういう意味だい？」

陳二はいらいらして尋ねた。

「一石ごとに一元銀貨だ。あんたたちの村は全部でだいたい百石の田んぼだから、百元は要るかな。みんながいくらか出しあえばいいんじゃないかい。餓え死にはしなくてすむぞ。」

「そりゃ、そりゃできる。」陳二はあわてて呉得謹から離れて、「待っててくれ、すぐにみんなに言うてくるから」と言った。

「いいよ、じゃあな」

呉得勤は彼が聞いたかどうかにはお構いなく、得意げに走っていった。

①李麻子(リーマーズ)、黒斑鳩(ハイバンジウ)、一只眼(イーチャーエン)は人名で、中国ではその人物の特徴を付けたあだ名で呼ぶことがある。李麻子は「あばた面の李さん」、一只眼は「片方の目が見えない人」の意味。

## 二

彼は大きく高家沖のところに走っていった。「老張！」「高貴中！」

長いこと呼んだが二人の姿は見えなかった。高貴中の妻が出てきて、夫は家にはいない、老張もどこかに彼を探しにいった、と告げた。すぐに彼は高貴中が“わら小屋の女房”のところにいったのだとわかり、王五をむりやり連れていった。

再び彼は飛ぶように走り、途中で一只眼と黒斑鳩をつかまえた。

「おい、おまえ、気でも狂ったのか？ いったいどこに行くんだ？」

「米が助かるんだ」陳二は速度を落として走りながら言った。「米が助かるだぞ」

「どうやって助かるんだ？」黒斑鳩が言った。「でたらめ言うんじゃないぞ」

「本当だよ。金が使え……水車を借りて灌漑するんだ！」すぐに陳二はあえぎながら言った。「今から……若後家のところに行って…みんなに知らせるんだ。」

一只眼(イーチャーエン)は喜び、四人はさらに足を速めた。王五だけは面白くなかった。

“わら小屋の女房”のところに着くと、四人は狂ったように中に入り、息をとめて、しきいの板を蹴とばした。とりわけおかしかったのはちょうど“わら小屋の女房”が李麻子に酒をつごうとしていたときで、それがごみ箱にぶつかった。みんなはそこで大声を上げて笑い出した。

家の中が混乱していたちょうどそのとき、酔っ払った高貴中が老張にひきずられてやってきた。

「みんな、ちょっと静かにしてくれ。いい知らせをもってきたんだ。酔っ払って引っ繰り返っているときじゃないぞ。」

陳二はこう言うと高いテーブルの上に飛び乗り言った。

「稲がみんな助かるんだ。早く胡区長のところに金を持って行って水車を借りて水を引くんだ。もう金をこんな悪女のためにつかわないで、自分の命を救うのに使わなきゃ。みんな目を覚ますんだ！ 特に何人かのふだんはかなり賢い方々は」

この話をしているときの陳二は口角泡を飛ばし、屈強な青年農夫の心をハンマーのように叩いて震わせたようだった。特に老張は驚喜した。急いで高貴中が陳二に質問を投げた。

「いくら要るんだい？」

陳二はまた大きな声で厳粛な調子で言った。「一石で一元だ。村全体では百石は超さないから、百元あればできる」

だがみんなは黙ってしまった。それぞれが眉をしかめ、李麻子は反対した。

「明日食う飯もないのに、どこに金があるっていうんだ？ 胡区長のやろう、この機会を利用してわれわれと取引したいと思っているだけなんじゃないかい。俺さまはそんなばかなことはしないよ。」

みんなも彼と似たようなものだった。それで異口同音に言った。

「そうだよ！ 金があって飯が食えたら、だれが喜んでこんなばかみみたいな事するもんか。」

このとき、一人の若者が突然テーブルの上に飛び乗った。声を聞くだけで河北省の小阮だとわかった。

「みなさん、聞いてください。」小阮は言った。「さっきの李麻子の話は間違っている。胡区長が俺たちを利用して金を稼ごうとしているのは間違いないかもしれないとしても、俺たちだって食糧を作れないし、食べる飯もない、地主も状況をわかってくれるとは限らない、小作料の支払いを待ってはくれない。そう考えたらもう死ぬしかないでしょう。だからみんながそれぞれお金を集め、助けてくれるように地主にお願いするのがいいんじゃないかと思うんです。そしたら俺たちが窮地に陥るのだけは免れる。」

小阮がこの大いに筋道の通った話しを終え後、みんなはすぐ声をそろえて賛成し、李麻子(リーマーズ)も感心して負けを認めた。

「それじゃまずこの女に貢いだ金を返してもらい、それから奥さん連中に頼んで腕輪を質入れしてもらおう」

陳二はまず高貴中に“わら小屋の女房”を連れてくるように言った。

「ちくしょう、俺もあんたにや大金を使った。」高貴中はもう酔ってはいなかった。

「もうあばずれ女なんか要らないよ。金、返してくれ。水車を借りに行くんだ。」

「そうだ、みんな汗水たらして稼いだ金を返してもらって苗を救うんだ、我々はもう酔っぱらっちゃいけないんだ。」

つづいて一只眼と李麻子が一緒に来て彼女をとり囲んだ。

「金を返せ！早く金を返せ！」

彼女は少し怖がっているようで、震えながら言った。「でも私も……私もお飯をたべなきゃいけない……ごはんを」声が小さくてほとんど聞こえないくらいだった、その目は光っていた。お願いです……哀れと思って、これからはどうせ……こんなことはしませんから」

老張と陳二がやってきた。

「おい、あんたもこわがることはない、あいつらに三分の二を返してみんなに出させる。これから米が採れたらあんたに返す。商売変えしたらもっといい。あんたに仕事を探してやれるかもしれない」

陳二の話は彼女を感動させた。彼女はうなずきながらすぐに部屋の中から二十元を取り出してきた。

「これはみんなあんたたちが持って行っていいよ。私は三元でごはんを食べるよ。」

陳二はうれしくなって彼女の肩を叩いていった。「ほんとうにももの分かる人だ！」

### 三

すぐに村じゅうにこの知らせが知れ渡り、全員がいっしょになって金を集めはじめた。それぞれが妻の首飾りや当分は要らない綿入りの掛け布団や敷き布団、綿入れの服を質に入れて金に換えた。黒斑鳩は妻に黙って銀の腕輪を売ったというので妻からの平手打ちを食らい、さんざん責められた。

あれこれ手を尽くしたが、集まったのは60元だけだった。それでみんなは地主に助けてくれるように懇願しに行った。だが

結果は失望をもたらしたただけだった。彼らを助けるどころか、「小作料のわずかの減少も許さない。その理由は、彼らが水車を借りずにわざと苗を枯らしたからだ、」と言うのだ。

農民は弁明のしようのない状況で、ただ頭を下げ濡れ衣を着せられたまま、再三地主に助けてくれるようにと懇願した。その結果、地主は恩恵を施してやるといわんばかりに、「胡区長のところに行って、自分の田を耕作する農民には九掛けで水車を貸してくれるように相談してみる」と言った。

実は地主も、今回胡区長が組織した「旱魃農民救済委員会」の委員の一人だった。だから当然、自分のために九掛けで優遇する権利を行使したのだ。同時に胡区長との商談を成立させるためには、農民にどうしても水車を借りに来るように仕向けられないわけにはいかなかった。要するに彼は金儲けのためにやったのだ。

柳村の指導者として一目置かれている陳二や老張はひたすら指を折ったり伸ばしたりして計算したが、百元の九掛けといっても九十元かかる。彼らが集めたのはちょうど六十元で実際には三十元足りない。三十元不足で彼らには為す術がなかったのだ。

「やっぱり、みんなに古米を売ってもらい金を集めたらどうだろう。どっちみち今のところは飯のことは考えなくていいんだから」

老張はそう言うのとためいきをつき、陳二はただキセルで頭を搔いた。「みんなに集まってもらい相談しよう！」

そこで陳二は即刻、村の総勢二十数名の農民を集めて自分で説明すると、みんなは黙ってしまった。

「不足の三十元を何としても集めなけりゃならん。じゃないとみんなが地主の制裁を受けることになる。これだけはわかってくれ」

高貴中はこのとき、酒を飲んだときよりも興奮していたようだった。とつぜん小阮が声を上げて話をした。「そのとおりだ。一人一人がまたいくらか古米を売りさえすれば足りる。どっちみちお国と地主から取り上げられるようになっている我々だ。ほかに方法がない。ちくしょう、どっかに飛んでいったところでどこも同じだ」

「わかった！」李麻子が芭蕉扇であおぎながら言った。「おれは言いたい。これからは女たちにも工場で働いてもらい金を稼いでもらう。ただ飯を食わせるわけにはいかない」黒斑鳩はこれを聞くと喜んで拍手して言った。「そうだ、女房に一生ただで飯を食わせられることはできない。」そこでみんなは笑いだした。

我先にとそれぞれがいくらかの金を追加し、合計が九十元をちょっと超した。あまった二元で彼らは酒と肉を買い、柳の木の陰で大いに飲み食いした。

女たちも加わり、中に“わら小屋の女房”も招かれていた。

「明日は苗の復活が見られる」と老張が言った。「みんなでお祝いせんわけにはいかんぞ、さあみんな、一杯飲もう」と老張が言った

そこでみんなは酒杯を高く上げた。

黒斑鳩は女が工場で働くという話が頭に残っていて、立ち上がって重々しく言った。

「でも、昨日の李兄さんの話も実行しなきゃならないんじゃないかい。女たちは飯を食っては男たちを苦しめる以外、何もしてないじゃないか。」

この時、黒斑鳩の妻がじろりと彼をにらみつけた。それを受けて小阮が説明しはじめた。「女たちが毎日ただ飯を食ってるわけじゃないぞ。おれの嫁さんみたいに、毎日畑の草刈りや放牧に忙しく働いている。」

話がここに至ると、彼はそっとそばでほほえんでいる妻を見て、「だが、みんながあとでもっと貧乏になったら、飯を食うのにも困るかもしれない。だから女たちにもちょっと仕事を探してやってもらってほしい。もっと金を稼いでくれたらパンだって買って食べられる」

「その話は人間の話すこと、道理が通ってる」黒斑鳩の女房が言った。「だけど今さっき黒斑鳩が言った話はでたらめもいいところだよ。」

黒斑鳩はここで声を上げる度胸はなく、そこでみんなは笑いだした。“わら小屋の女房”も言った。「私も工場の給金をみんなに使ってもらえるように出したいと思ってる。私はただ、あんたたちが私のことを『あばずれ』とか言って罵らなければ、それでいいんです。」

こう言うと彼女の目から涙があふれ出てきた。この哀れな女は不当な扱いを受けていると言ってもいいだろう。まだまだ容色も衰えてはいずに女らしい若さを保っていたのが、三年前に夫が亡くなり一人娘も誘拐されて失ってしまった。残されたのは自分一人で、やむなくこの仕事をしはじめたのだった。

それに、収人も決して多いとはいえず、農民一人がひやかしに来ても十か二十の銅銭だけで、ときには自分が酒やたばこやお茶代を立て替えるのだから、一泊してもらわないことには儲けにはならないのだ。

金は貯まっているとはいえ月に20日は商売にならない日にぶつかることもしばしばだった。農民はほとんどが妻帯者で、昼間を除いて(それも最近のことだが)、悶々としてどうしようもないときにだけ藁小屋にやってきて気を晴らす以外、家以外で妻を傷つけるようなことを自由にやれるわけではないし、彼らに余分に使えるような金はなかった。

村の中でただ高貴中だけが、時たま泊りではなく行って遊んでいるが、これも彼の妻が正当に自分の相手をしてくれないのが理由だった。

だからこの話を聞くと、特に感動した高貴中は立ち上がり、まず拍手をして言った。

「まさに女の中の君子だ。何て賢明なんだ。米が採れたらあんたに柄入りのいい布地を贈るよ。」

“わら小屋の女房”は彼に向かってちょっと笑った。この時みんなも次々と拍手した。高貴中の妻はかっとし、顔色が真っ赤になった。



まだ独り身の王五はこの状況があまり適当ではないのを見てとると、機転をきかせて高貴中の妻に目配せした。もともと二人も気が合うところがあったのだ。

「老高、馬鹿なことをするなよ」と王五は高貴中の肩を軽くたたき、「高姉さんが嫉妬するから用心しろよ」と言った。

みんなはそこで大笑いし、高貴中の妻は恥ずかしそうに一言「なにをばかげたことを言ってるのよ」と言った。

## 四

翌日の早朝、胡区長が水車で水を入れ、三日足らずで村じゅうの田んぼに水が張られた。農民たちは跳びあがって喜んだ。老張が言った。「こりゃおてんとうさまの雨より痛快だ。」

「本当に外国人は頭がいい。こんな機械が作れるなんて!」「将来は多分火を出す機械を作るかもしれんぞ。」農民はみんな驚いてあれこれ言い合った。一人の老人が言ったことが面白かった。「七十年生きてきたが、こんなのは見たこともなかったよ。これは本当に黄帝の治水事業よりも偉大だよ!」

胡区長と地主はそばで冷たく笑っていた。この種の搾取の何と罪深いことよ。この二人はこの機会を利用して金儲けをしたいだけの良心のない人間なのだ。ぴかぴかの銀貨 90 元が老張の手から胡区長のポケットに移動した。地主はにこにこして老張の肩を叩いて言った。「あんたは本当にもののわかったやつだ!」

みんなが喜びを感じているのを見て、老張は地主のことばにむっとしたが何も言わなかった。小阮は心の中で罵っていった。「ちくしょう、陰険なやり方で人を騙すこのばかやろう、雷に打たれて死んじまえ!」

枯れ始めていた稲の苗がだんだんと生氣を取り戻し、農民たちも一生懸命農作業を始めた。女たちは工場で仕事を探したり、ある者は街に出て家の下働きをした。家で針仕事をして出来上がったものを売ったりする者もいた。いままで怠け者だった黒斑鳩の女房も“わら小屋の女房”といっしょに、うまれて初めて紡績工場に働きに出た。みんなは互いに忙しく働き、飲み食いにも困る者はだれ一人いなくなったのだ。

だが、いいことは長くは続かないものだ。数日後には水田の水は太陽に吸い取られ、再び地面は乾燥しはじめた。腹が減って減って仕方がなくなった人間が食べ物を目にすると、ふだんよりはよけいに食べてしまうような状況に似ていた。雨が降らずに長いこと乾燥していた田んぼは、限られた水量の水など瞬く間に吸い込んでしまい、再

び乾燥が始まり、苗が急速に枯れようとしていた。彼らは胡区長のところに行き灌漑の機械を貸してもらおうように頼んだが、頼みは拒絶され、再び90元を用意しなければならなくなった。

老張はずっと怒っていてもう生きていくのも嫌になった。陳二はひたすらこの馬鹿げた話を持ってきた呉得勤のことを罵った。

小阮が言った。「誰のせいでもありませんよ。恨むんだったらこんな苦労を強いる天を恨むしかありませんね。」

「なあ！」高貴中が口に出した。「もし金があったら、また水車で水を入れられるじゃないのか？」

黒斑鳩が突然跳び上がって言った。「誰もこんなバカげたことにまた金を出そうなんて思っちゃいないよ」

「本当だ。おれはとっくに、これはペテンだって言った。」李麻子が言った。「そのときにみんなはどうしてもおれの言うことを信じなかった。90元がまるまるむだになった」

「みんな、けんかするなよ。なあ、一回雨乞いをしたらどうだろう。なんてったって、神さまは哀れに思ってくれるよ」高貴中も陳二の意見に賛成した。

ちょうどこのとき、楊樹村の呉得勤がこの状況を訴えにやってきた。彼はもっと怒っていたので、陳二も彼を罵るには忍びなかった。

「あんたたちのところ苗は今も良くないのかい？」と陳二が聞いた。「二回目の灌漑をやる金はないだろう？」

呉得勤は彼が皮肉を言っているのに気づいたので、哀願するような口調で言った。

「あんたが恨みに思っているのは知ってるよ。けどな、おれがああ劉家凹の劉四を恨まないわけはないだろう！ あいつが言ったんじゃないければ、おれだってあの灌漑はしなかったさ。もう飯も食えなくなりそうだったんだよ、あの時は！」

そこでみんなは無念さや怒りを口にし、翌日に龍王廟に行って雨ごいをしようという事になった。

遠くでも近くでも、雨ごいの歌声が聞こえていた。特に陳二たちの村の歌声は悲痛な調子を帯びていた。雨ごいをするときには、農民はすべて服と靴下を脱ぎ下ばきだけになり、ヤナギの枝で編んだ丸い帽子をかぶり、手には線香を一本持ち、一歩進むたびに一句唱える。そして一回頭を地面に付ける。

彼らはこのようにしながら柳村から龍王廟まで歩いて行き、まるで体を洗ったように汗でびしょりになった。しかし彼らはそのようなことは気にせず、ただひたすら

敬虔に龍王さまに雨ごいをした。老張が指揮をとって龍王像の前に額ずき、わけのわからないことを言いながら祈った。「菩薩さま、すぐに雨を降らせてくださったら、我が家では3年間、精進いたします。」「龍王さま、靈験あらたかに雨を降らせてくださったら、収穫のあとで盛大な芝居を掛けます。」

それからみんなが次々に祈りの言葉を言って拝んだ。意外にもあの一只眼と黒斑たちも、地面に何度も額を叩きつけて祈った。

このように三日間続けて願掛けをしたが、天は無情。雨が降る兆しささえ見えなかった。もう手の施しようがなかった。幸いにも女たちが一生懸命に工賃を稼いで家族を養っていた。だが買ってくる米がまた値上がりし、にっちもさっちもいかなくなりそうになった。

このような苦しい日々が二十日間あまりも続いた、彼らは毎日、枯れしぼんでいく苗を見ながらため息をついているしかなかった。それか、前よりもただ横になって寝ているしかなかった。あの老張でさえ、一日中寝台の上でごろごろと寝返りを打っていた。

ところがあるとき、小阮が黄家墩に柴を売りに行ったとき、突然近くの山の上に滝があるのを発見した。そこで彼は急いで帰って村中に知らせた。みんなはこの思わぬ知らせに喜んだ。そして水を引く方法を考え、柳村までの水路を掘ることに決めた。

彼らはすぐその日から鍬を使っての水路掘りを開始した。一人一人が全力を出した。

昼も夜も働き、女たちは家に帰ってご飯を作って運んできた。この光景が十里も続いた。しかしみんなが協力したことで、意外にも五日で工事が終わる見込みとなった。

柳村に水路が達するその日の午前中、女達は、前に宴会をやった柳の木の下で歓迎の歌を歌いながら料理と酒を用意していた。

## 五

陳二、小阮、王五、高貴中たちに率いられた四つのグループの姿が見えてきた。女たちの歓声が上がり、その声を聞くと彼らの一人一人が元気づけられた。

「早く来て！ もうお酒と料理ができてよ」

“わら小屋の女房”の声だった。この声が聞こえると高貴中はさらにいっしょうけんめい土を掘った。王五もわざと遠くから高貴中の妻に言った。

「おい、高大嫂！ あんたも疲れただろうよ！」

「だいじょうぶよ。がんばって。あんたのためにごちそうを用意したから」

彼女はわざと高貴中のことを怒っているようにして言ったのだが、すでに妻から心が離れていた高貴中は彼女のこのことばにはかまわなかった。

それからすぐに水路が開通した。水が田んぼの中に流れ込み、みんなは狂喜して手を取りあい、陳二が歌うのに続いて最も勇壮な喜びの歌を歌った。

人の力を求めるよりは 自分の力を求めるほうがいい  
 水路を掘って五日目で 畑に水がやって来た  
 何が水車だ、龍王だ そんなのみんな偽ものだ  
 一人一人の誠意と力があってこそ  
 我らの誠意と力があってこそ  
 心を一に 力を合わせて最後まで  
 でこぼこだらけの険しい道も何のその  
 勝利はついに 我らの手にやって来た

歌いながらそれぞれが自分の女房を連れて柳の木の下での宴席に座った。宴会の席が笑い声で満たされた。高貴中は妻を自分で王五の前に連れていき、自分は“わら小屋の女房”のところに行った。

そのあと、お祝いの拍手の音が爆竹のように鳴り響いた。

一九三五年五月六日夜、上海にて

□□□□□